

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

ランプと温かいおもてなしの宿 船窪小屋 信高山岳会篇

12、13の2日間、信高山岳会の例会で、杉山、沼田両氏と3人で船窪小屋を訪ねた。昨年はこちらに一泊し、翌日は北葛、蓮華と縦走して扇沢に下りたが、今年は逆に船窪、不動、南沢、烏帽子を経てブナ立て尾根を下山した。

船窪小屋は、オーナー夫妻の人柄からリピーターの多い山小屋だ。オーナーの松澤宗洋、寿子夫妻は「お父さん」「お母さん」と呼ばれて訪れた人皆から愛されている。私ももちろんファンの一入である。・・・船窪小屋は北アルプス・七倉岳の稜線に立ち、灯りはランプ、暖は囲炉裏、電気がないので冷蔵庫もありません。1954年に奥さんの寿子さんのお父さんである福島宗市氏によって今のテント場の場所につくられました。ところが、翌年の2月小屋の様子を見に登った宗市氏は雪崩に巻き込まれ、小屋のオープンを見ないまま亡くなってしまったのです。その後、遺志を継いだ当時18歳の娘さんの寿子さんが継いだのです。それをサポートしたのが大町山の会の仲間たちでした。その一人が宗洋さんでした。現在の船窪小屋は昭和49年に現在の場所に移築されました。(以上、HPより抜粋転載)・・・小屋につくと、まず「お疲れ様でした。お茶どうぞ。」と誰かれなく温かいお茶で歓迎してくれる。松澤夫妻に会うために、寿子さん手作りの美味しい食事を食べるために、宗洋さんの話を聞くために、ランプの灯りとお茶会を楽しみに、ここに来る人は何かしらこの温かい山小屋の魅力を訪ねて、やってくるのだ。



今回も私たちは、その温かいおもてなしに大感激。夕食後、消灯までのおよそ一時間は宿泊者が囲炉裏を囲んで、一夜宿をともにした偶然を語り合い、最後は宗洋さんご夫妻のお話でお開きとなるお茶会が開かれるが、これも小屋の人気の一つ。自己紹介に続いて、今宵はサプライズがあった。この小屋のファンのお一人、M氏によるアコーディオンのミニコンサートが開かれた。お開きの宗洋さんのお話は、氏がまだ黒部ダムの工事をしていたころ、赤牛岳の頂上近くで、鉱山技師と思いき行き倒れた白骨死体を発見した話や、黒部ダム建設の知る人ぞ知る裏話などいつまでも聞いていたいような興味深い内容だった。・・・翌13日は、実働11時間超、朝5時45分に出発し、高瀬ダムに着いたのは、17時だった。予報では、午後は前線が通過して雨ということだったが、それほど大崩れもせず、快適な山行だった。

ランプと温かいおもてなしの宿 船窪小屋 大町高校篇

上記した信高の例会の日程が決まる前、大町高校の山岳部はミーティングで次のような話をしてた。「18(金)、19(土)に中信地区の新人戦があるが、その後の4連休をただ潰すのももったいない。」と。そこで、僕は「少し金がかかるが、買い出し準備をしている暇もないので、年に一度くらいはゆっくり山小屋泊での山行はどうだろうか？ 行くなら山岳部の先輩宗洋さんが経営する船窪小屋にしたら？」と提案した。かくして、

20（日）、21（月）の両日、僕としては2週連続同じコースにはなるが、小屋泊まり秋山山行を実施することに相成ったのであった。

20日、7時学校に集合し、七倉ダムに向かうと、もう駐車場は満杯と、ダム下の臨時駐車場に回された。エーッ、いきなり100mのダム登りとは！連休ゆえ仕方ない、どうせ今日は船窪小屋までだからと気合を入れて歩き出す。七倉尾根は標高差1400m、取り付きの500m近い急坂、途中には鼻突き八丁と呼ばれる350mの登りなど、三大急登とも言われる「ブナ立て尾根」や「赤岩尾根」など以上の標高差を持つ、北ア屈指の急勾配の厳しい尾根だ。冒頭の100mとあわせ、1500mを一気に登る。途中には標高140mごとに標識がある。天気はいいが、上部に登るにつれ少しガスが出てきた。12:15、標高2300mの天狗の庭に到着。森林限界となって、見晴らしも良くなってきた。ここまで登れば、あとはもう一息だ。ゆっくり昼食を食べていこう。周りにはアカモノ、クロマメ、コケモモといった天然のフルーツが鈴なりだ。疲れた身体には最高のビタミンCの補給である。13:15 船窪小屋着。連休中の遭難対策ということで、大町の榛葉氏が詰めていた。今日も船窪で事故があり、ヘリレスキューから帰ってきたところだというのを聞き、こちらも気を引き締める。出迎えてくださった松澤さん夫妻に生徒たちを紹介し、記念写真をとってから、七倉岳まで足を延ばす。ちょうど安曇野側にガスがかかり、ブロックン現象が見られた。歓声をあげる生徒たち。ゆったりとした時間を過ごして、小屋に帰ると、「先生、今日はお客さんも多いし、天気もいいで、今日の夕食は外でお願いします。」と言われた。囲炉裏端の夕食も乙なものだが、天気の良い日に沈む夕陽を眺めながら大パノラマを目の前にした外での食事は、なおいちいものである。

連休の中日の好天で小屋は満杯、定員を超える52名が宿泊で、大忙しの様子である。小さい小屋なので、囲炉裏端にまでお客を泊めねばならない始末。この様子では今日はお茶会はないかなと思っていたら、宗洋さんが「今日は大町高校だけでお茶会するかい」と声をかけてくださった。通常ならお茶会は7:00からだが、さすがにこれだけのお客さんで手張ったのか、7:40に「大町高校の皆さん、これからお父さんの説教があるので囲炉裏端にきてください。」と声がかかった。釣られて出てきたお客さんも4、5人いたが、その人らも交えてネパール茶でのお茶会がはじまった。宗洋さんのお話は、昭和29年、ちょうど船窪小屋が出来た年、宗洋さんご自身が大町高校（当時は大町南高校）三年生の夏に山岳部長として、10泊11日の大山行を行った時の話と、冬の鹿島へ行くための準備山行の話だった。当時は4泊までしか認められていなかったが、顧問を口説きOBが付いていくという条件で、校長に許可してもらって敢行した山行は、扇沢から劔を経て、立山、薬師、黒部五郎、三俣を経由して裏銀を烏帽子まで、さらに船窪、針まで足を伸ばして扇沢まで下ったという盛大なものだった。そのとき、船窪には出来たばかりの小屋があつて泊めてもらったそうだ。当時はまさかその小屋のオーナーになるなどとは夢にも思わなかったが、疲れた身体にその時の一宿一飯の恩義は忘れられなかったとのことだった。



宗洋さんのお話に関き入る6人の生徒

今から60年以上前の大先輩の合宿に生徒たちは大感激。一方、後輩を我が孫のように慈しんでくださる宗洋さん。最後に、寿子さんのリクエストで、後輩と一緒に「山岳部歌」を歌う宗洋さんの顔を見て、ああここに連れてきてよかったと心から思った。